

共同討議

総題「分析哲学の始まりはどのようなものだったのか？」

提題：大西琢朗（立命館大学）・伊藤遼（早稲田大学）

司会：久木田水生（名古屋大学）・稲岡大志（大阪経済大学）

趣旨

19世紀に興った解析学の厳密化の運動は自然数論にまで波及し、やがて「数とは何か」という最も根本的な問いへと（一部の）数学者たちを向かわせた。そしてそれは最終的に数学を論理学に還元する試み、「論理主義」につながった。論理主義の主唱者であるフレーゲやラッセルは記号論理学の道具立てを洗練させ、それを使って数学的概念を定義し数学的言明の意味を明らかにすること、および数学の真理を基礎づけることを目指した。特に彼らは数を表す語の指示対象を、ある種の高次な概念（概念についての概念）として定義した（後にラッセルはこの方法を放棄するが）。論理主義のプログラム自体は全面的に成功したということではできないが、フレーゲとラッセルのアプローチは多くの哲学者に影響を与えた。それは哲学における「言語論的転回」をもたらし、数学の枠を超えて科学や哲学に応用されるようになった。そしてこのことが「分析哲学」と呼ばれる一つの大きな潮流を形作った。

以上のようなストーリーは現代の私たちにとってなじみ深いものであり、またその歴史の流れは必然的で、不可避的なものであるかのようにも思われるかもしれない。しかしそれは私たち（現代の分析系の哲学者）の多くがフレーゲやラッセルの、あるいはそのフォロワーたちの圧倒的な影響下であって、また何度も語られたストーリーが轍のように私たちの見方を方向づけているからかもしれない。しかしその轍から少し離れてみれば直ちに様々な疑問が浮かんでくる。例えば、なぜ数学に基礎づけが必要だと思われたのか、そもそも数学を基礎づけるとはどのようなことなのか、なぜ論理学なのか、なぜ語や文の意味や真理が問題になるのか、なぜ数詞の指示対象が必要だと思われたのか、フレーゲやラッセルのアプローチを数学以外の分野に応用することはどれほど妥当なのか、といった疑問である。

今年フレーゲの没後100年に当たる。これを機に上記のような素朴な疑問に向き合うのも悪くないだろう。依然、フレーゲやラッセルの影響は大きいですが、しかしここ1世紀の間には彼らの影響下に確立したパラダイムに対して批判的な立場やオルタナティブ（例えば非古典論理や推論主義など）も発展している。そこで今回の共同討議ではフレーゲやラッセルを専門的に研究しながらも、従来のパラダイムに対するオルタナティブについても精力的に研究をしている大西琢朗氏と伊藤遼氏を招いて、分析哲学の始まりをいつもとは少し異なるフレームで眺めてみたい。

「フレーゲ革命」はどれほどの「革命」だったのか

大西琢朗(立命館大学)

イアン・ハッキングは『数学はなぜ哲学の問題になるのか』などの著作において、現代の(主に分析的な)数学の哲学に対する批判を展開している。数学は古代から現代に至るまで、(すべてのではないにせよ)多くの哲学者の関心を惹きつけてきた。しかしハッキングの目からすれば、現代の数学の哲学は、その本来の哲学的興味から離れた議論に終始している、つまり、「数学はなぜ哲学の問題になってきたのか」の理由を忘れてしまっているように見えるというのである。このネガティブな評価に少なくとも大筋で賛成する人は、私を含め多いと思われる。例えば、基礎づけや形式論理への過度の関心集中を避け、数学の実際のあり方に注意を払おうとする「数学的実践の哲学」などはそのような批判的風潮のひとつの現れだと言えるだろう。

ただし、フレーゲ没後100年を記念する今回の共同討議ではあえて、フレーゲをひとつの源流とする分析的な数学の哲学の肩を持つ方向で考えてみたい。ハッキングは、とくに数学的証明にかんする哲学的興味(興味深いことにそこには派生的にプラトニズムの問題も含まれる)については、古代から現代への連続性を強調し、それに基づいて現代の哲学を批判する。しかし一方で、フレーゲに始まりゲーデルに至る「論理学革命」はやはり、証明や数学的対象というものに対する私たちの見方を一変させた、大きな断絶ではなかつただろうか。ハッキングの議論には、どうもこの点に対する検討が不足しているように思われるのである。

その全容を明らかにするなどは到底望めないとしても、本発表では、ハッキング自身の「科学的推論のスタイル」のアイデアを援用しながら、論理学革命による断絶とはどのようなものであったか、それがどのような新しい方法、命題、対象、可能性をもたらしたのか、多少とも検討したい。

伊藤遼（早稲田大学）

本発表は、19世紀の末から20世紀のはじめにかけて、フレーゲが提示した「論理主義」の立場を、現代哲学の観点、とりわけ、ブランダムによる「推論主義」の観点から、捉え直すことを目標とする。

論理主義とは、もちろん、算術の諸命題を論理学の諸概念と論理学において認められた推論のみをもちいて証明することにより、数学を基礎づけようという試みである。一般に、この試みは、算術の諸命題に正当化を与えるという課題への取り組みとして捉えられている。しかし、論理主義をこうした演繹的正当化の試みとしてのみ理解するならば、その試みの意義は疑わしい。素朴に考えれば、『算術の基本法則』においてフレーゲが持ち出す「公理V」は、例えば、 $1+1=2$ という算術の命題よりもむしろ正当化を要するもののように思われるからである。

しかし、論理主義には、もう一つ重要な課題があったと考えられる。それはすなわち、各々の数や「数」という概念の内実を説明するという、言い換えれば、各々の数や「数」概念に対するわれわれの理解を、それらがいかに振る舞うかを把握するという「形式的理解」の段階から、それらが何であるのかを把握するという「実質的理解」の段階へ至らしめるという課題である。『算術の基本法則』におけるフレーゲは、「概念の外延」とよばれる存在者に訴えることで、各々の数や「数」概念に直接的定義を与え、それらについての実質的理解を得ることを試みる。このとき、彼の公理Vは、概念の外延の振る舞いを指定するために提示されていると理解できる。

本発表では、「実質的理解」と「形式的理解」のあいだの区別を、近年ブランダムが提示する「推論主義」の立場を発展させることで定式化する。そして、この取り組みによって、上述の二つの課題とそれらの相互の結びつきを現代的な観点から明確に述べることを試みる。